

揺らぐ安全神話

柏崎刈羽原発

〇四年から議事録公表などによる情報公開をうたう安全委だが、審査の核心ともいえる詳細な検討を行う分科会については傍聴や撮影は許していないのが現状だ。議事録にしても早く

「核物質防護、財産権の保護等に係るために慎重に取り扱わざるを得ない」
二〇〇七年十一月、現在も安全審査中の電源開発大間原発（青森県）を扱う原子力安全委員会分科会について取材班が行った傍聴、撮影の申し入れが断られた理由である。一切が非公開。日程すら明らかにしなかった。

はがれたベール

< 8 >

検証・設置審査

半月ほど後に概要をホームページに載せているにすぎない。

さらに、公開された大間原発の議事概要には、「核物質防護」などに絡む内容は見当たらなかった。

早く情報を提供すべきではないか。そんな声が上がっている。

日本活断層学会会長で立命館大教授の岡田篤正（六五）は「非公開で審査されてき

に、入倉は審査自体の見直しにも力を入れる。中越沖地震を契機に、安全委が原発の耐震安全性の審査体制を強化するために新設した「特別委員会」の委員長に就任。初会合で「原発に最新の知見をどう生かしているのか。責任は重大だ」と訴えた。

現在の審査は経済産業省原子力安全・保安院と安全委が「ダブルチェック体制」で当たる。しかし、入倉の震性をどれだけ厳しく評価

「審議の過程」公開を

体制強化へ専門家も連携

昨年十二月、東京電力柏崎刈羽原発の周辺海域断層に関する〇三年の再評価で、東電と国が活断層の疑いが強いと把握しながら四年半も黙っていたことが発覚、強い批判を浴びた。公表、公開を軽視してきた結果ともいえる。

「審議の過程」公開を体制強化へ専門家も連携
昨年十二月、東京電力柏崎刈羽原発の周辺海域断層に関する〇三年の再評価で、東電と国が活断層の疑いが強いと把握しながら四年半も黙っていたことが発覚、強い批判を浴びた。公表、公開を軽視してきた結果ともいえる。

■社会に決定権

専門分野間の縦割りを打破し、風穴をあけようとする動きも出てきた。原子力、機械、地震工学の三学会の有志が〇七年十二月、初の合

■縦割りに風穴

活断層の問題など国民の関心が高い耐震安全性を扱

情報公開を求めると同時に

志が〇七年十二月、初の合



過去の安全審査を根底から揺るがした中越沖地震。

柏崎刈羽のように、もし断層がいくつも走る地震列島・日本が五十五基の原子炉を抱える現状で、「命の安全の保証は万全なのか。

羽1号機の審査にかかわった松田時彦（七五）は、国や電力会社が説明責任を果たすことを条件にこう断言する。「原発を認めるかどうかを決めるのは科学者ではない。社会なのです」

（文中敬称略）

〓おわり〓

次回シリーズは二月中旬に掲載する予定です。